

もしもしドクター No.180



まつだ小児科医院
松田 隆 院長

メタボリックシンドローム (内臓脂肪症候群) (Metabolic Syndrome代謝症候群) ①
～小児期メタボリックシンドローム①～

小中学生の肥満は1960年代には、全体の2～3%にすぎませんでしたが、現在は10%にまで増えていると言われています。性別、年齢別、身長別の標準体重から肥満度を算出し、肥満度が20%以上を肥満傾向児とする昨年の文部科学省の調査では、6～12歳における肥満傾向児の出現率は8.11%、男子では9歳から17歳で10%を超えています (図1)。

図2. 年齢別・性別の肥満傾向児の出現率 ([文部科学省学校保険統計調査] より)

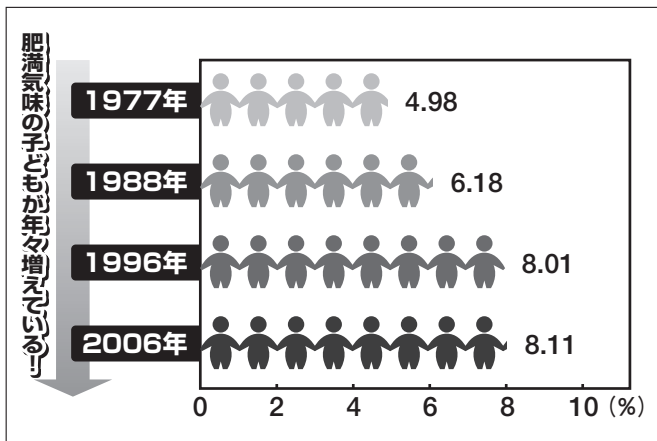


図1. 6～12歳における肥満傾向児の出現率推移 ([文部科学省学校保険統計調査] より)

欧米でも同様の傾向がみられており、高カロリー食を取り過ぎる食生活の乱れや運動不足という現代の生活様式や生活習慣の変化が肥満を起こしやすくしていると考えられます (図3)。

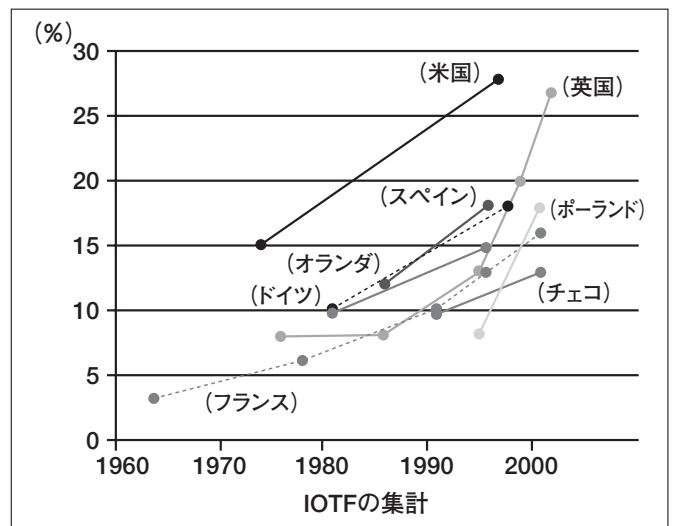
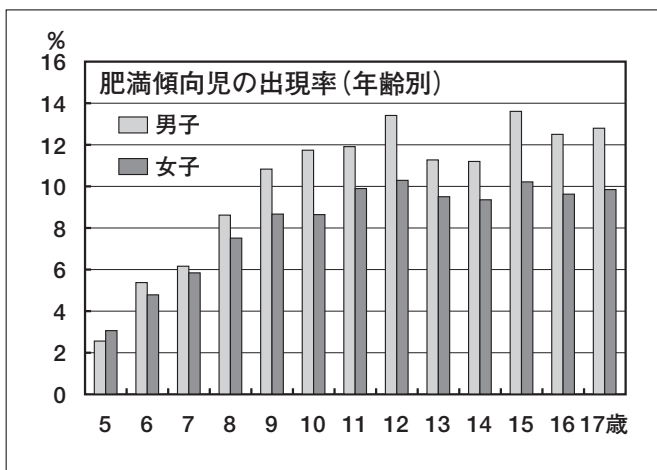


図3. 欧米・米国における小児肥満の頻度 (各国において増加傾向が見られる。IOTFの統計による。)

年齢別・性別にみると、男子は7歳で6.2%と増え始め、9歳で10.8%と1割を超え、9～17歳で10%を超える状態が続き、最も高いのは15歳の13.5%でした (図2)。女子の肥満傾向は男子ほどではなく、10%を超えるのは12歳の10.1%と15歳の10.0%でした。



小児期の肥満の2/3は成人の肥満へと移行すること、また体重が過剰傾向にある小児は成人になると肥満しやすいことがわかってきました。そういった意味でも、肥満対策は小児期から必要であることがわかります。さらに、子どもたちにも、糖尿病や脂質異常、高血圧、脂肪肝など、合併症を伴う肥満症が増えてきています。成人の肥満と同様、内臓脂肪蓄積から分泌される種々のアディポサイトカインの増加や減少、インスリン抵抗性を介して、耐糖能異常、高脂血症、高血圧などの病態を生じます。今や、小中学生にもメタボリックシンドロームが確認されており、生活習慣病の発症年齢の若年化が明らかになってきています。